
彼女の言葉は真実か

風月莢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女の言葉は真実か

【NZコード】

N4148C

【作者名】

風月莢

【あらすじ】

オカルトを信じない少年と、自分を「死神」と言ひ黒髪の女。夏のある夜の出来事。

見えないものは信じない。神。天使。馬鹿馬鹿しい。

ああでも。

「死神よ」

目の前の彼女は面倒臭そうに咳いた。束ねられた黒髪がふわりと揺れる。氣急げな雰囲気が『別に信じなくてもいいけど』と語っていた。

それは、呑気な、どこか間の抜けた夏の夜だった。七月と八月の合間の、ただただ重たい空氣の中。俺は實際、確かに何かを待っていた。嫌気がさすほど単調な毎日に飽きて、平たく言うところの『不良』という人種に成り済まして、世界が都合良く動くのを待っていた。そんな人種のご多分に漏れず、大した目的もなく街をぶらつきながら。

そんな時突然ふと視界に入ったのが、ウェーブのかかつた黒髪をヒダリで束ねた女。うんざりするくらいの湿氣もどこ吹く風で、いつそひんやりと冷氣を感じるほど、涼やかに佇んでいた。

髪の色に調和するような、闇を塗り込めた漆黒の瞳。視線が行き交う。

「ミナミ、ロク」

背中にざわ、と悪寒が走った。

南、陸。

彼女が真つ直ぐに俺を見据えてそう言ったからだ。その漢字にすると何とも座りの悪い単語は紛れもなく俺の名前だった。

「なんだ、おまえ…」

俺はオカルトに興味はない。それでも思い浮かんだのは、そつち方面の予想だった。

「死神よ

投げやりな回答が返される。死神？

冗談だらう、『幽靈』よりタチが悪い。だが、『馬鹿じやねえ』と一笑に伏すには、彼女に『死神』という言葉が似合ひ過ぎていた。

「…オカルトに興味ねーんだ。まして死神なんてなおさら興味がねえ」

彼女が苦笑した。『それはそうだらう』とこうよつて

「私も逆の立場だつたら信じないでしょうね

『死神』に興味なんてない。

「リク。あなたとても懸命だわ」

興味なんてない。

だが彼女の挑発めいた笑みには、手を伸ばしたらひらりと交わされてしまうような陰りが混じついて、それは俺にとつて酷く魅力的だった。
…

(後書き)

続編掲載中です。

NEXT「彼女の言葉の裏側に」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4148c/>

彼女の言葉は真実か

2011年1月27日06時08分発行